

地球温暖化対策を議論する、国連気候変動枠組み条約第 21 回締約国会議、いわゆる COP21 が、11 月 30 日～12 月 11 日にかけてパリで開かれています。そのため、これをきっかけに市民の環境意識を高めようと、フランス全土で秋から冬にかけていろいろなイベントが企画されました。パリのフリーペーパー、オヴニー誌が特集している、新しい市民運動のコンセプトや活動を興味深く読みました。なかでも、2013 年にナルボンヌではじまり全土に広がったアルテルナティーバ (Alternativa) という運動は、気候変動に歯止めをかけるため、自分たち自身の毎日の暮らし方を変えていこうというもので、個人の生活に干渉されることをきらうフランス社会の市民運動としては、きわめてユニークなものと言えます。

他にいかにもフランスらしいのは、エコで気持ちよく暮らすことを「エコ・オルガスム」と名づけて活動している団体です。18 才～35 才の若者を対象に、環境にやさしく、また健康にも良いことの具体的な提案をしています。これは、2008 年に友人が 20 歳でガンで亡くなったことにショックを受けた学生たちが、環境と健康の問題を考えてもらうために立ち上げた団体です。大学や高校で無料のワークショップを開いたり、オープンカフェで環境中の内分泌かく乱物質や、遺伝子組み換え植物、添加物入り食品、ナノ粒子を使った化粧品などについて情報提供をしています。また性的な絶頂感をあらわすオルガスムという団体名で活動しているように、性生活で使う化学物質についてもタブーなく言及し、多くの潤滑剤には発ガン性があり、生殖機能のおとろえをもたらす可能性のある物質が使われていると注意を喚起しています。いろいろ読んだり、また実際に 20～30 代の若者達に話を聞いても、フランスの環境運動の特徴は、単に政府の施策に反対するだけでなく、専門家と協同して実現可能な代替案を出してくるところ、その実践にあるようにみえます。そしてその実践をなるべく楽しくやろうというのがフランス的ですね。

温室効果ガスのひとつである Co2 削減のために、化石燃料に関係するすべての会社への投資を、ボイコットする運動などがあります。しかし、何かひとつを問題の元凶として攻撃する「エコポリス」のようなやり方でなく、まず自分たちの暮らし方を、積極的に楽しく、エコフレンドリーにする「アルテルナティーバ」や「エコ・オルガスム」のアプローチはより多くの人達を魅きつけ、実効性も高いのではないのでしょうか。

参考資料 オヴニー 2015 年 9 月 15 日号